

〔巻頭言〕

ウイルスの脅威

株式会社 園田 昭 浩

ここ数年間、ウイルスによる脅威はものすごい。人の世界では COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が拡散され、早いもので1年半が経過しました。中国で報告された当時は SARS（重症急性呼吸器症候群）、MARS（中東呼吸器症候群）同様、短期間で抑え込めると甘く見ていましたが、現状は御覧の通りで、パンデミック、長期化し、いつ鎮静化するかも予想がつかない状況になってきています。畜産の世界では、鶏に昨年の暮れから今年の初めにかけて高病原性インフルエンザが猛威を振るい、1000万羽近い鶏が処分されました。豚では豚熱（旧、豚コレラ）が2018年9月に発生して以来、2021年8月末の時点で、71事例、113農場、5屠畜場で発生し、253,254頭（農林水産省HPより）の処分が行われました。このような疾病が大流行するたびに感じるのには、今度はどんなウイルスと戦わなければならないのかということです。電子顕微鏡でしか見れない微小体にいつも脅かされています。人や動物は外的な損傷には比較的強いのに、細菌やウイルスには弱いのです。治療に関しては細菌や寄生虫には効果のある薬剤がありますが、ウイルスに対する薬剤は限られたものしかありません。現に、COVID-19に対しては臨床実験段階であり効果の程が確立されていませんし、畜産の分野ではほとんどありません。よって、ウイルスに対する対応

は予防のワクチンしかないのです。ワクチンの開発においては、COVID-19 ワクチンは、100%とはいかないまでも、重症化を抑える効果は実証されてきました。人の世界ではウイルスの感染がなくなる限り評価されないのに対して、畜産の世界ならば発症、死亡率を抑えることが可能であれば優れたワクチンと評価されます。

現在、豚熱の予防で使用しているワクチンは日本で確立され、以前使用していたワクチンであり、感染防御と抗体の上昇はほぼ100%で素晴らしいワクチンです。にもかかわらず、ワクチン接種をしている農場で発生が確認されています。特に、一貫農場で母豚にワクチン接種がいきわたったところの離乳子豚と肥育での発生がみられます。母豚からの移行抗体が低かったワクチン接種前離乳子豚や移行抗体が高くワクチン接種していたにもかかわらず、抗体が上昇しない個体などに野外ウイルスが感染しています。野生の豚熱感染イノシシがウイルスの拡散に関与していますが、農場への侵入を防げば豚での発症はないはずです。農場周辺で野生の豚熱感染イノシシが死亡し、その死骸をついばんだ野生動物（タヌキ、ネズミ、猫、カラスなど）が柵の隙間から侵入、飛来し、ウイルスを農場に持ち込む場合や、沢水の飲水利用による場合が多いかと思えます。

野生の豚熱感染イノシシが発見されている地域

では、ワクチンを打つことで安心感があり、気のゆるみが出るのでしょうか。野生のイノシシがいても、いなくても農場防疫を緩めてはいけません。

COVID-19 対策で、手洗い消毒、マスクの着用、密を避け、人流を減らすことを徹底することで、感染拡大は防げるはずで。事実、毎年流行

するインフルエンザは昨年減っています。ワクチンを接種したからと言ってこれらの対策を怠れば、COVID-19 の終息は望めません。豚熱も同様に、基本的な防疫対策を守ることで野外感染を最小限に食い止め、以前のような豚熱清浄国になるのではないのでしょうか。